

<ラジオ関西 池坊美佳さわやか文庫にゲスト出演>

平成22年10月24日(日) 5:00～5:30

池坊：おはようございます。池坊美佳です。今朝のお目覚めはいかがでしょう？

日曜の朝のひととき。名作、話題の凶書をボランティアの皆さんの朗読でお送りする池坊美佳のさわやか文庫。

どうぞ今日も一緒にお楽しみください。

佐野：おはようございます。アシスタントの佐野スミコです。今朝ももうしゃべりたくてうずうずしていらっしゃる、先週に引き続いて「なにわのシネマ弁護士坂和章平先生」が今朝のお客様です。おはようございます。

坂和：おはようございます。

佐野：よろしくお願いします。

坂和：先週に引き続いてよろしくお願いします。

佐野：先週もちょっといろいろなお話を伺いましたが、今日も皆さん最後まで是非この番組を聞いていただきたいと思います。今日は名作映画から学ぶ生き方ということでね、それをテーマにお話をいただきます。どうぞ皆さん、この作品は勇気ある生き方の参考になりますとかいろいろ言っていただきますので、メモのご用意をなさって、このラジオを聞いていただきたいと思います。

池坊：これは、本にされて売られるんじゃないんですか？

坂和：これは、今ゲラがあがっている段階で、11月30日が発売予定です。

池坊：これ、すごく生きるヒントですよ。

佐野：そうそう。本当に。

池坊：勇気ある生き方とか。

佐野：信念を貫くとかね、いろんな・・・全部でいくつあるんですか？

坂和：読みやすくするべく50本に絞って、テーマも結果的には5つに分けました。

佐野：栄えある人生を生きる・・・ね。

坂和：そうですね。これを膨らませるのは、いくらでも膨らますことはできますから。第1弾で成功すれば、第2弾、第3弾と。

池坊：でも、いいのは試練に打ち克つとかね。本当に自分の元気がない時とか、例えば愛する人を失った時とかって本当にこの1冊で、力になったりするんだなって。

佐野：元気になるね。

坂和：是非そういうことを狙いたいということで、先週お話しした裁判員の本もかなりユニークで私的な本でしたが、これもやっぱり弁護士としていろんなものを見てると。それから、映画評論家としていろんなものを見てると。その2つの視点から自分なりにまとめた本ということですね。

佐野：あの、弁護士さんですからね、美佳さん。訟廷日誌っていうのを持っはるんですよ、スケジュール帳。さっき、ぴゅっと開けはったら全部映画の試写会のスケジュールが書いてあって、いつ弁護士活動してはるんでしょう。

池坊：でも、弁護士活動がないと、こういう贅沢は出来ない。

坂和：そうですね。映画の字が大きいだけで、法廷の字もちょこちょこっと書いてるんですけどね。

池坊：私この間ね、雑誌のお仕事で、自分の思い出がある本3冊と、あるビデオ見て感想を書いてくれっていうのがあったんですけど、なかなか3冊が思い出せなかったんですよ。その前に先生にお会いできてたらなあと思います。

佐野：本当ですね。顧問シネマ弁護士で。

坂和：喜んで。先週はだいぶ褒めていただいたし。

佐野：またこれから映画のことでわからないことがあったら、坂和章平先生にとということで。

坂和：メールで何かご意見いただければ、すぐに返しますから。

池坊：はい。ありがとうございます。心強いですよ、私。

佐野：だってそうね、美佳さんは、結構雑誌社からそういう依頼とかなんかありますもんね。

池坊：思い出せなかったりしながら、前見たのになんだったっけなとか。

坂和：あるでしょ。それがね。私のシネマルームは10年間、ほぼ2000本の映画を全部書いてるんですね。もちろん目次がありますから、あいうえお順の目次があって、ほぼ2000本の映画の目次があるわけですよ。だから、目次をひろえば、私が3年前、5年前に書いたシネマの何の何ページというのが出てくるわけですね。これものすごい財産なんですよ。

池坊：そうですね。このもうすぐね、発売されるこのゲラを拝見していて、私がチェックして私が読もうと思うくらいに、すごかったですもん。確かにこの映画良かったなとか。

佐野：そうですね。じゃあ今日もユニークな弁護士さんのというよりも、映画評論家坂和章平さんにいろいろとお伺いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

坂和：今日もよろしくお願いいたします。

佐野：この番組は、読む人聞く人の心をつなぐ日本朗読検定協会の提供でお送りします。

佐野：では、改めまして今朝のお客様でございます。なにわのシネマ弁護士坂和章平先生です。

坂和：おはようございます。よろしくお願いいたします。

佐野：よろしくお願いいたします。さっきお話がちょっと出ましたが、名作映画から学ぶ生き方、5つの章に分かれているようですが、もう一度しっかりと・・・

坂和：第1章勇気ある生き方、第2章絆を深める、第3章信念を貫く、第4章試練に打ち克つ、第5章愛ある人生を生きる、この5章でトータル50本ということで、私の独断と偏見で選んでいます。

佐野：例えば、勇気ある生き方だとどんなのですか？

坂和：そうですね。勇気ある生き方もちょうど10本選んでるんですけどね。多分これは一番有名なのは、『沈まぬ太陽』。これは、日本航空の中でいろいろ問題が起こった渡辺謙さんが出ている映画ですけども。

池坊：長くて途中で休憩が入ったんですよね。

坂和：これは・・・違う。

佐野：沈まぬ太陽は違います？

坂和：そうやったっけ、忘れた。

池坊：先生は試写会で見てるから違うんですよ。

佐野：劇場で見た時はそうやったけど・・・

坂和：そうですね。

佐野：あと、『フラガール』とか。

坂和：そうですね。『フラガール』は本当に田舎の村の復興ということですよ。わかりやすいのは、『県庁の星』っていうのがね、今公務員改革とか当然いろいろやってますけども、県庁さんって偉そうにやってるやつが、ある一人の女の子の生きざまに目覚めさせられるという非常にわかりやすい映画ですね。だから1章の勇気ある生き方っていうのと、3章の信念を貫くというのが、それと4章の試練に打ち克つ、ここらがやっぱり悩んで問題がある時に前向きに生きようよと、それをこういう映画からその生き方を学ぼうよという形になるんですけどね。例えば、その信念を貫くというところで、一番わかりやすいのは、『Ray』。それから、『エディット・ピアフ』とかね。こういう伝説的な人間、レイ・チャールズですよ。それから、エディット・ピアフ。非常に伝説的な生きざまを現実見せてくれる人達だから、これは非常にわかりやすい。私がここでおすすめしたいのは、18番の『CEO』、佐野さん、ご存知ですか？

佐野：CO2やったら・・・

坂和：これは会社の親分、最高経営責任者ということですけども、これ実は中国のハイアールという元々冷蔵庫の会社なんですけどね、その会社が青島で1984年頃に設立されて、そこから急激に成長していったという映画なんですけどね。中国の改革開放政策が進んで、ぼちぼち民間の会社が出来たと。それが、20年・30年で世界的な規模の会社にまで成長したと。

それはなぜやと。それは、社長の信念が一番大きいということなんですけども。よろしいですかね？ここで、『CEO』の一番の名物シーンというのがね、その当時は中国の製品というのは、粗悪品が多いと。もともとドイツから生産ラインを引っ張ってくるというのだけでも、最初からドイツの生産ラインをもってくることに、中国人には出来ないだろうということで大反対があったんだけど、それを頼み込んでやっとこさ出来たと。一番面白いのは、それで冷蔵庫が、製品が出来ましたと、それまでは中国の人たちというのは、一番良いものは外国に売るんやと。残った傷のあるのでええやんかと。多少色がおかしくてもええやんかと。足がちょっと曲がっててもかまへんやんかと。冷蔵庫として使うのに関係ないやんかということやったんですね。ところが、この社長がそれではあかんと、要するに品質が一番やと、物を作って売るということは品質が一番やということで、今までは甘い考えで、不良品でもええやんか、ええやんかとなっていたんだけど、その意識改革をするということで、不良品の冷蔵庫を並べて、親分がハンマー持ってきて不良品の冷蔵庫を全部ぶっ潰したと。その冷蔵庫1台が1年分の給料になってるというのに、少しでも傷があったらそれは商品にはならんから潰すということで意識革命が起こったというんですよね。そういうことを本当に実践したことによってやっぱり力が伸びてきたということで、日本の特に昨今の甘っちょろい経営者とかに比べると、その違いが甚だしいなというのがわかると思うんですよね。

池坊：結構中国映画とか韓国映画とかも、観てらっしゃるんですね。

坂和：そうですね。中国映画は特に多いんですよ。中国映画約200本あるんですけどね、私が観たやつが。もちろん中学生時代から中国映画を観たわけではなくって、そもそも中国映画が日本で公開されるようになったのは、1980年代に入ってからですから、ここ20年のことなんです。ここにも書いてある『山の郵便配達』と一番有名なのが『初恋のきた道』。この2つが日本人には有名ですけどね。本当に中国の心温まる人間関係とか自然とかが描かれている、素朴な中国が描かれているということで日本人の心を打ったということですよ。その後もいっぱい良い映画がありましてね、本当に中国映画にはまる人は結構たくさんおりますね。

池坊：私も一番最初に韓国映画を観たのが、『シュリ』っていう映画なんですけども、こんな映画が韓国で出来るんだと思って、それはすごい衝撃でした。

坂和：それは、むしろ逆でね、日本は平和だから非常に嬉しい、ありがたい、幸せだと。だけど、そうだからこそやっぱり平和ボケというマイナス面もあって、そういう問題意識が薄れている。韓国は南北問題があるから、それから離れられないということで、常に南北問題をテーマとした名作が生まれてくるんですよ。1950年代の東西冷戦の時だって、『寒い国から帰ったスパイ』とかね、アメリカとソ連の冷戦をテーマとして、いろんな人間の本性に迫った映画が出来てますよね。だから、必ずしも緊張状態にあるってことは、映画作りの面では、悪いわけではない。

佐野：私なんかはそのこの標題でびゅっと目がいくのが、愛ある人生を生きるですね。

坂和：佐野さんでもやっぱりそうですか？

佐野：でも、って・・・

池坊：佐野さんは愛に生きる女なんです。

坂和：失礼いたしました。

佐野：さっきおっしゃってた『初恋のきた道』が一番に。あと、『たまゆらの女』。

池坊：それぞれにコメントが・・・こういう時にこういうのを読むんだっていうのがすごくわかりやすく導いていた

だいているので。

坂和：そうですね。

佐野：『たまゆらの女』は、遠距離恋愛ですね。

坂和：遠距離恋愛ですね。これは何と言っても、コン・リーという中国の女優の非常に綺麗な女優ですよ。そのコンリーがちょっとエッチなシーンもあったということで、男はたまらんというそういうスケベな面もありますけどね。

佐野：そうですか。あと、夫婦喧嘩は犬も喰わないという『我愛你』。

坂和：これ、中国語を勉強する場合の最初の言葉ですけどね。

佐野：そうですね。アイ・ラブ・ユーでもんね、ウォ・アイ・ニー。結構本当に中国の映画が多いですけども。

坂和：そうですね、中国映画が10本くらい入ってますね。

佐野：中国でなんか先生ご本を出してはるんですって？

坂和：実は2年ほど前に北京電影学院という世界最高峰の総合映画大学ですけどね。そこで、ちょっと坂和流の中国映画論みたいなのを講義したんですけどね。もちろん通訳付きですよ。だから、日本人がなんで中国映画の解説をするんやっていうのは、向こうも新鮮やったみたいですけどね。ただ、その時非常に困ったのはね、タイトルがね、例えば『初恋のきた道』って言ったら日本人はみんな知ってるんやけども、中国のタイトルと違うわけですよ。中国やと『私の父親母親』というタイトルなんですよ。そういうことだから、日本人がこれだこれだといっても伝わらない。ストーリーを言うとやっとならわかる。そういうところがちょっと困るんですけどね。これじゃあかんと思ひまして、私も1年半前から中国語の勉強に勤しんでおります。

池坊：すごいですね。

佐野：映画のために中国語を？

坂和：映画のためもありますけど、本業の弁護士業でも中国業務というのがいろいろ出るだろうなと思っているし、わざわざ仕事展開のためということはないけども、面白い仕事がちょっと1つ2つあったんですけどね。そういうことのためにも、わかった方が良くと。

佐野：すごい。シネマ、シネマって言ってますけども、シネマ弁護士なんて勝手に呼んでますけども・・・

坂和：光栄です。

佐野：どっちか言うと、シネマ一辺倒って感じで、なんぼ考えても先週もそうやし、今週もそうやけど、弁護士活動よりもこっちの方がって思っていますけど。

坂和：すみません。

佐野：いえいえ。

池坊：ご自分の邦画、洋画のベスト5というのは、これからも変わっていくかもしれないのでしょうか？

坂和：当然そうですね。

池坊：私は是非3年に1回くらいはお会いしたい。もっとお会いして、映画の紹介とかもしていただきたいんですけども、先生のベスト5がどこの時に変わったとかを是非・・・

坂和：私の映画で講演する時、こういうレジメを使うんですけどね。俺のベスト5は何だっていうことになると、だいたい固定してるんですよ。つまり、映画っていうのは、その人の人生を反映するし、自分の青春時代の1本とかね、はじめて嫁さんとデートした時の1本とかね、思い出と密接に絡まっていますよね。それと、年とってくると感性もある程度鈍くなってくると、若い時に本当に感じたものがずっと印象に残っていると。それが、名作だ、名作だとなりがちなんです。だから、それはそれでいいんだけども、我々いろいろ議論してますとね、やっぱりそうやって言うんですよ、最近の映画はあかんとかね。それ言うてると、あんたもおっさんになってるわと。あんたの新しいものを感じる力がぼけてるんだということなんです。

池坊：先生の洋画のベスト5は、『風と共に去りぬ』だったり、『ウエスト・サイド物語』だったりするんですけども、

邦画は『砂の器』とかなんですよ。これは、また全然社会問題とかだったりとか、人の痛みを抱えたとか、全然違うじゃないですか。それがまた、先生の違う顔が出てきて面白いなと思ったんですけどね。

坂和：『砂の器』はダントツのトップで、これは多分一生変わらないだろうなと思いますけど。まさに宿命というのがね、ピアノ協奏曲の宿命というのも挿入曲ですけども。ハンセン病の問題作であると同時に、エンタメ性も含まれていると最高の映画やと思いますよ。

池坊：私は先に本を読んで、そのあとドラマを観て、昔の映画を母達と観に行ったんです。母はもちろん映画を観てたんですけども。こんなに伝えたいものが違うんだというか、また全然違うものを観てる、時代によって、時によって違うんだなと思って。

佐野：加藤剛さんが主演の方ですね。お父さん役の加藤嘉さんが哀愁あふれるね、
あの親子で海辺を歩いているところというのなんかも、今でも覚えてますわ。

坂和：巡礼の旅で海が荒れてるところをね、子供の手を引き連れて歩いているというシーンが焼きついて離れませんよね。

佐野：『砂の器』本当にそうですね。

坂和：それと同じで、例えば『卒業』なんていうのも、教会から連れ出して走っていくシーンとかね、ああいうのも絶対忘れられないし。

佐野：先生それしはったんですか？奥さんと。

坂和：多少そういう面もないでもないですけど。

佐野：そうですね。ロマンをかき立てられましたね、私達ね。

坂和：また、ちょっとエッチな面もあったからね。

サノ：そうですね。そういうのもありましたね。

坂和：邦画のベスト2がね、西田敏行さんが出た『敦煌』というね、井上靖さんの小説の中国の敦煌なんですよ。

サノ：ロケしてすごかったんですよ。エキストラの数が。

坂和：これはね、むちゃくちゃ西域とかシルクロードとか憧れてたし、この映画のイメージがずっとあったところで10年ほど前に、ちょうど2001年に西安に旅行に行つて、その後敦煌にも行つて、撮影の現場とかも見学するチャンスがあったんですけどね。まあそりゃあ、カルチャーショックを受けましたね。中国旅行でいろいろ見てくると、もちろん広さも違うし、景色も違うし、ものすごい勉強になりますね。2000年にはじめて行つて、2010年の今日まで15、6回行つてますけどね。やっぱりそこから得られるもの、感じるものというのは、ものすごい大きいですね。それはまあ、中国語をある程度しゃべれるようになればもっと面白いなと思って。

池坊：先生の講演とか面白いでしょうね。

サノ：よくしゃべりはると思いますわ。

池坊：絶対寝たりしないと思いますよ。

坂和：最近の講演で、みんなパソコンを見ながらね、スクリーン上に示してやるでしょ。あれやるとだいたい寝てしまうんですよ。やっぱり、しゃべっているとね、あそこらへん寝てそうやなって思ったら、わざわざそっちの方なんかボール投げて見るとかね、ちょっとしばらく黙ってみるとかね、そういう意地悪しながら、反応を見てやらないと、面白くないですよ。

サノ：先生は芸術大学から客員教授の話がねえ・・・

池坊：学校の先生みたい。

坂和：法科大学院では、何回か教えましたけど。

サノ：大阪芸大の映画学科とか、そんなところからお声がかかればねえ。

坂和：お声がかかれば是非やらせていただきますけども。

サノ：この感じでいったら、映画作りにみんな若者が大いに頑張りはるやろと思いますけども。

坂和：そうですね。まあ、こんな関係もあって映画監督のお友達も何人かいるんですけどね。そら何ととっても映画観ている本数は私の方が多いですからね。

サノ：最後にさりげない自慢が出ましたけども。あの、それではそろそろ先生お別れですけども、また今後も素晴らしい映画・・・

池坊：でも、年に1回は、今年のベスト10を是非。

サノ：また来てください、スタジオにね。

坂和：いつでも呼んでいただけたら。

サノ：ありがとうございました。どうも2週にわたりまして。

池坊：ありがとうございました。

坂和：ありがとうございました。